

松木園遺跡出土の土器について

本 田 道 輝

1. はじめに

南九州弥生時代後期の土器として、指宿上層式土器あるいは薩摩式土器と呼ばれ、後に成川式土器と総称されるようになった土器群がある。この成川式土器は、その形式名が付けられた成川遺跡の調査において和泉式に先行する古式土師器を伴出し、杉原莊介氏は「本遺跡の主体をなす時代は、弥生式土器の時代の終末的な様相を示してはいるが、中央においてはすでに古墳文化にはいつているものと推察する。」と述べられ⁽¹⁾、それより古く河口貞徳氏は、この土器群の中に須恵器を伴出するものがあることを指摘しておられる⁽²⁾。このように、成川式土器を弥生時代後期の土器とすることは、その形式名設定当初より問題の多いところであった。

近年の調査によれば、入来遺跡6号住居址において須恵器Ⅲaと共伴し⁽³⁾、七社遺跡において双孔棒状土器と⁽⁴⁾、永山遺跡10号墳では地下式板石積石室墳に円形にめぐらされた周溝内に供献され⁽⁵⁾、共伴する鉄剣等から5世紀中葉を中心に、6世紀中葉を下限とする実年代が考えられている。しかし、一方で下限を8世紀頃とする意見もあり⁽⁶⁾、上限についても弥生時代に入れる意見や、古墳時代からとする意見がある。又、成川式土器の概念も人により微妙に違いが感じられる。成川式なる名称は、よく耳にし口に出す名称であるが、その実体はまだまだ不明確といわざるを得ない。

このように、成川式土器が不明確である原因は、たびたび指摘されるように形式名にあるものと考えられる。成川式土器を出土する遺跡の示す種々の様相は、とても一形式内での様相とは考えられず、近年の調査においても、成川式土器にはかなりの年代幅があることは明らかである。成川式土器の性格がそうである以上、成川式なる名称を形式名として使用することが、成川式土器の実体を不明確にする原因の1つと考えられる。いま1つの原因は、成川式土器をはさむ前後時期の土器編年が不明確である点である。成川式土器を論ずるには、土器を細分化してその変遷を明確にすること、及びその前後時期の土器編年を確立することが、まずなされなければならないであろう。

ところで、成川式土器なる名称が付けられる以前、河口貞徳氏はすでにこの土器群を二つに区分されておられる点は重要である⁽⁷⁾。即ち、笹貫・一の宮上層・千束・県立医大等の土器は、肩部が張り下部へ急にしまり、低い口頸が附けられ、頸部及び胴部に竹管文・寛拙文が施された幅広凸帯をめぐらし、丸底又は小形の平底を有する壺形土器、外反又は直口の口縁部をなし、頸部に凸帯をめぐらし、底部は中空の脚台で表面にこぶ状の突起を有する甕形・鉢形土器で、時に須恵器を伴出し、また精選した土質で赤色塗料された高坏形土器を伴う。一方、中津野の土器は、楕円形のやや細長い胴部に1条の格縄凸帯をめぐらし、低い口頸部で丸底の壺形土器、頸部がしまり、口縁部が

外反し、ふくらみ胴部に中空の脚台を有し裏面にこぶ状の突起を有しない壺形土器である。この二区分された土器は、成川式土器としてまとめられてしまったが、河口氏の述べられるごとく区分できることが、近年の調査例でも明らかであるとともに、中津野タイプの土器群の方がより古い形態の土器である点でも大方の意見は一致しているようである。

先に述べたごとく、成川式土器の実体を明確にするには、成川式土器自体の細分化とともに、その前後時期の土器編年（即ち南九州における弥生後期・及び土師器・須恵器の土器編年）が必要であるが、現段階では遅れている土師・須恵器の編年よりも、弥生後期土器の編年を急ぐ方が効果的であるように思える。しかしながら、これまで明瞭な弥生後期遺跡の発見例に乏しく資料不足の観があり、さらには、成川式土器群の実年代が明らかになるにつれ、古墳時代の土器は増加し、弥生後期は空白となるという、以前の編年観の逆転現象がみられるというのが現状であった。森貞次郎氏に代表される「山ノ口式を後期前半、一ノ宮式を後期後半」⁽⁸⁾とする意見もその点から出たものと考えられる。

山ノ口式・一ノ宮式は、河口氏編年では中期後半とされるが⁽⁹⁾、いずれにしてもこの両形式と、成川式土器群の中津野タイプの土器群を結ぶ接点となる土器を発見すれば、そうしてその土器の編年上の位置が確定すれば、山ノ口式・一ノ宮式の編年上の位置を補強し、又中津野タイプの土器群が成川式土器群中の最古形態であることが確定するとともに、その編年上の位置も明らかになってくるのである。松木壺遺跡はまさにこの接点期の遺跡であり、久しく待ち望まれていた遺跡の出現であった。多量の土器は、上記問題点を解明する糸口を我々に与えてくれる。

2. 松木壺遺跡について

松木壺遺跡は、日置郡金峰町尾下字松木壺に位置する。尾下は、金峰山系の山地を後背に、万之瀬川・堀川及びその支流により形成された沖積平野に細長く突出するシラス台地で、両翼に広い水田地帯を望み、その比高差は松木壺で16mを測る。金峰町の諸遺跡は、南九州の考古学史上重要な意味を持つものが多く、それらはいずれも、この沖積平野を望む微高地・台地上に位置している。松木壺から眺めれば、水田を隔てて南約1kmで、阿多貝塚・堀川貝塚・上焼田遺跡、西約1.5kmで高橋貝塚・下小路遺跡、東南約1.5kmで下原遺跡、さらに歩けば本遺跡と関係の深い中津野遺跡、東に足をのばせば約4.5kmで吹上町の入来遺跡・白寿遺跡と、各時期の遺跡が密集する地域である。

松木壺遺跡及びその周辺は、古くからしばしば土器の発見がなされたらしいが、本遺跡の第1発見報告は、有元彰順氏であり、あいも変わらず工事破壊による発見であった。即ち、地下げによる溝状遺構断面の露出が発見されたのである。その後、この地は二度の破壊を受け、溝状遺構の大部分は消失してしまった。三度の破壊により採集された土器は、前述の中津野タイプの土器であったが、壺形土器底部は多くが平底である点が注目された。三度目の破壊は、溝状遺構下底部を残す段階で発見したため、地主・業者の了解を得て調査することができたのである。

3. 出土土器（第1～5図）

ここにあげる土器は、溝内出土の土器であるが、説明補足の為数点採集資料も取りあげた。溝内

からは、他に土製投弾・少量の石器・軽石加工品が出土しているが、今回は取りあげない。

出土土器は、甕・壺・高杯の3タイプであり、甕・壺はさらに大形のを区分できるので、ここでは甕・壺・高杯・大形甕・大形壺の5分類により記述することとした。

甕形土器（第1図）

口径20cm内外のものが主体となり、煮炊きに使用されたと思われる、胴部・口縁部にススの付着するもの、内面にこげつきの見られるもの等がある。底部・下胴部は、火熱により紅褐色に変化し、表面が剝離しているものもある。同一層内の出土ではあるが、器形の変化からⅠ・Ⅱ期に区分し、その後の変化を知るために採集品より2点抽出しⅢ・Ⅳ期とした。

Ⅰ期（第1図1～3）

中空の低い脚台を有し、胴部は張らない。短い口縁部は外反し、いわゆる「く」字形口縁をなすものであるが、立ちあがりが弱い。直線的な口縁部のもの（1・2）と、先端部へむけてはね上り気味（3）のものとがあり、口縁端は丸味をおびる。口縁部裏面は内側へ小さく張り出しており、明瞭な稜線を有する。色調は暗褐色で、内外面ともにていねいにナデ調整され刷毛目を残さない。少量の出土である。

Ⅱ期（第1図4～7）

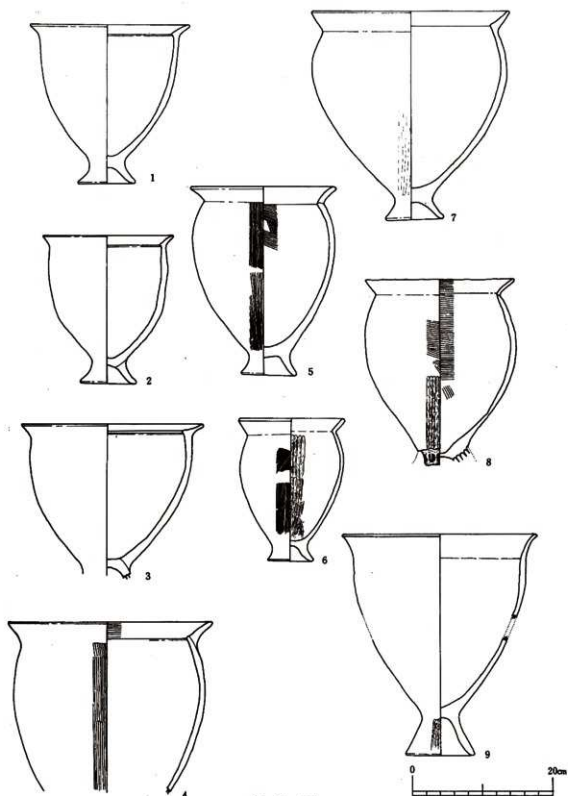
- a.（4） 中空の低い脚台を有し、胴部にやや張りがみられるようになる。「く」字形の口縁部は、Ⅰ期と比して、やや立ちあがりが強く、口縁端は丸味をおびる。Ⅰ期において見られた口縁部裏面の張り出しは、きわめて形式的となりシャープさに欠ける。土器によっては、部分的にし、か認められない。色調は暗褐色～黒褐色で、刷毛目を残さないものと残すものがある。出土甕形土器の主体となるもので、Ⅰ期から変化したものであることは明らかである。
- b.（5～7） 中空の低い脚台を有し、胴部の張りはさらに強くなり、ために頸部がしまった形となる。「く」字形口縁部の立ちあがりも強まり、口縁端は丸味をおびるものに加えて平坦面をもつものが現われる。もはや口縁裏面の張り出しは消失し稜線を残すのみであるが、稜線がやや不明瞭になるものもみられる。色調は暗褐色～明褐色で、刷毛目を残すものが多い。出土量はⅡ期aの甕形土器について多い。

Ⅲ期（第1図8）

中空の脚台は、Ⅰ・Ⅱ期よりもやや高くなるものと思われる。器形はⅡ期bとかわらないが、口縁部の厚みが出土品と比較して全般的にうすくなる。これは、口縁部形成時の差異で、出土品が胴部上端に横から口縁部を接合する（4）のに対して、胴部上端に上部から口縁部を接合するためである。Ⅱ期bにそれに近いものもみられる。（5）又口縁部は指先で整えたままで、作りが雑になっている。色調は明褐色で、胴下部は強いヘラナデ調整である。

Ⅳ期（第1図9）

Ⅲ期の土器とやや時間差が感じられるが、Ⅲ期との間を埋める明確な資料がない。採集品ではあるが、乱れていない黒色土塊中に第4図7とともに検出されたものである。高い中空の脚台を有し、胴部は張らず口縁部はゆるやかに外反し、内側に稜線を持たない。Ⅰ～Ⅳ期の甕形土器のうち最も



第 1 圖

粗製で、器壁は凸凹している。

壺形土器（第2～4図）

壺形土器もⅠ期・Ⅱ期と同一層の出土であるが、壺同様Ⅰ期・Ⅱ期に分類される。その他少量の移入土器が検出されており、これらの編年上の位置は、本遺跡出土土器の編年の参考とすることができる。

Ⅰ期（第2図1～4）

a.（1～3） 胴部が球形からやや長胴化した器形となり、肩部は張りが強くない。頸部は立ちあがるかやや内傾化し、口縁部は大きく外反する。口縁よりやや下位に、粘土紐をめぐらし、擬似口縁とでも言うべきものを作り、二又口縁の形態をなす点はきわめて特徴的である。口縁端は平坦で、浅い凹線を1条めぐらすものもある。（2・3） 底部は平底で、胴部・肩部に数条の三角凸帯をつける。胴部に刷毛目を残すものと残さないものがあり、2は内面全体を赤く塗っている。

b.（4） 小型の土器である。球形の胴部に2条の三角凸帯をめぐらし、頸部はしまりそのまま外反し、口縁上部はさらに強く外反する。口縁端に浅い凹線を1条めぐらし、底部は小さな平底であるがやや丸味がある。細い刷毛目が一部にみられる。以上a・bは少量の出土である。

Ⅱ期（第2図5・6・第3図・第4図1・2）

a.（第2図5） 球形の胴部に3条の三角凸帯をめぐらし、上位2条に刻目を施す。この刻目は1条ごとにつけられたものである。頸部は強くしまり、短い外反する口縁部がつく。口縁端は平坦で、底部は平底であるがやや丸味がある。細い刷毛目が胴上部にみられ、内面にしぼり痕が残る。1点出土している。

b.（第2図6・第3図・第4図1）

出土壺形土器の主体となるもので、さらに細分化できる可能性もあるが、ここではまとめて記述する。球形からやや長胴化した胴部に1条凸帯をめぐらし（断面カマボコ形のものが多い）そこに刻目をほどこす。肩部はなで肩であり張りがない。頸部はⅠ類及びⅡ類aと比較してしまりが弱く、特に第3図4等はその典型である。口縁部は短く、直線的に外反するものとゆるやかに外反するものがある。口縁端に平坦面をもち、浅い凹線を1条めぐらすものが一般的で、底部は安定した平底のものと、やや底面が丸味をおびた平底のものが存在する。刷毛目はⅠ類より太目で、ていねいにで消されているものもある。第4図1は、凸帯がない点を除いて上記特徴によく一致し、焼成・色調等からも同一タイプであることに間違いない。器高の割に底面が大きくどっしりと安定している。

c.（第4図2）

この土器は、破片の欠失が多く図上復元した土器である。胴部が張らず長胴化し、そこに1条凸帯をめぐらして刻目を施す点ではbと同様であるが、めぐった凸帯が結合せず上下にずれる点が、他の土器には見られない大きな特徴である。このような凸帯のつけ方は、成川式土器の一群にしばしば見られる特徴であり、より新しい要素であると考えられる。頸部はあまりしまらずここに三角

凸帯を1条めぐらす。口縁部は短く、直線的に外反し、底部は小さな平底で、底面に丸味をもっている。壺というより甕といってもいいような器形である。

その他の甕形土器（第4図3～7）

第4図3は、胴部から頸部へと強くしまり、短い口縁部が大きく外反する器形で、平坦な口縁端には浅い凹線をめぐらし、肩部には3条の三角凸帯をめぐらす。Ⅰ期と同時期と考えられるが、三角凸帯のすぐ上位に櫛描横文を1条めぐらす。この横文は本県で初めての出土である。

第4図4は、10本1組の櫛描平行線文を3帯めぐらす無頸甕である。胴部が強く張り、口縁部へひけて内傾化する器形で底部は平底である。外面は全面的によく磨きされ光沢を有する。内面は荒なでされ、胴部にはその程度がのこる。一部刷毛目もみられ、口縁部裏面には、程度も1カ所認められる。

第4図5は、採集品である。頸部が立ちあがり、口縁部は外反して端部を肥厚させ、そこに3条の平行線をめぐらしている。11本の短直線を縦に施す箇所もある。頸部には刷毛目工具と同様と思われる施文で斜位に程度文をめぐらす。接合しない胴部破片には、同様程度文を羽状に施している。小形の甕と思われる。

第4図6は、いわゆる袋状口縁の小形甕である。球形の胴部は頸部でしまり、口縁部はやや外開きになりながら端部がキャリバー状に内彎する器形であるが、彎曲度は弱い。荒い刷毛目を外面全面に施している。胴部には程度が1カ所認められる。

第4図7は、Ⅱ期とともに採集されたもので、乱れていない黒土の塊の中から検出され、甕もかなりのまとまりがあるので共伴の可能性が高い。ていねいな作りで、胴部から底部へかけて全面に線刻が施されているが意味不明である。丸底で、直線的に広がる長い口縁部を有する。

高坏形土器（第4図8）

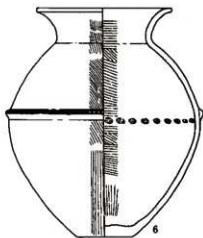
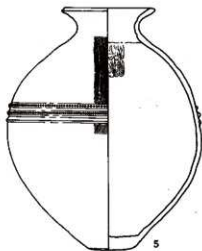
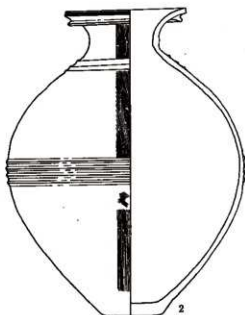
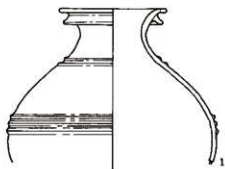
本遺跡における高坏形土器は少なく、全採集品をみても4～5点という数量であろう。調査によって1点出土した。坏部と脚部の接着部に、1条の三角凸帯をめぐらし、坏部はやや深く、口縁部は「」状にはり出して平坦面をつくる。内・外面とも磨きされ光沢をもつが、焼きが弱くもろい。

大形甕形土器（第5図4・5）

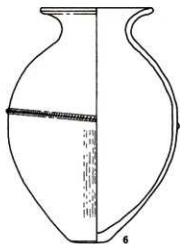
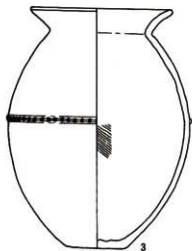
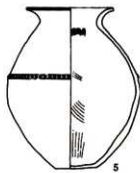
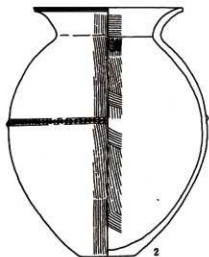
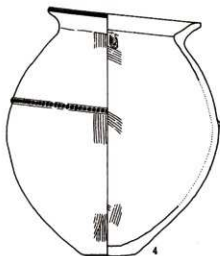
ここという大形甕形土器は、甕形土器と比して口径・器高ともに大形になるもので、底部が平底である点、口縁部下に凸帯を有する点等に差異が見出される。Ⅰ期・Ⅱ期に分類できる。

Ⅰ期（4）さほど大形とも言えないが器形の上からここにあげた。胴部は張らず、口縁部下位に上向きの三角凸帯をめぐらす。口縁部は、「く」字形で先端部は丸味を持ち、口縁部裏面は内側へ張り出す。刷毛目は見られず、胎土に金雲母を混入する。器形の特徴は、口縁部下位の凸帯を除けば、Ⅱ期とすこぶる似るものである。

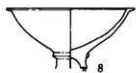
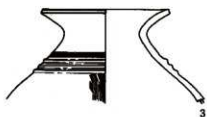
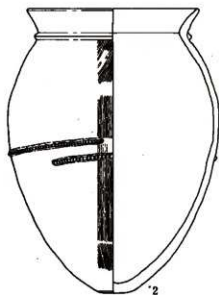
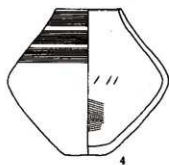
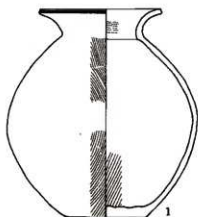
Ⅱ期（5）完形の土器であるが都合により上部のみ掲載した。Ⅰ期と比較して胴部の張りが強く、「く」字形をなす口縁部裏面は縁線のみで張り出しは見られない。口縁部下位の凸帯も非常に発達して、口縁部とさほど変わらない。底部は平底であるが、一部打ち欠かれて穿孔がある。荒い刷毛目を残し、火熱を受けた痕跡はない。この土器もまた、器形の特徴はⅡ期とすこぶる似るも



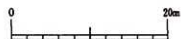
第 2 図



第 3 图



第 4 图



のである。

大形壺形土器（第5図1～3）

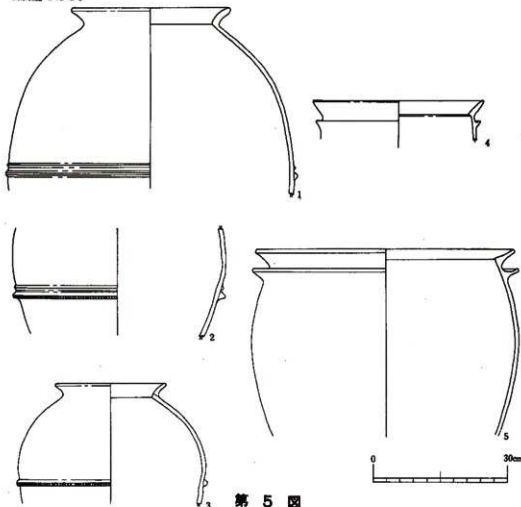
ここにあげる大形壺形土器も、壺形土器と比して全般に大形となるものである。器形は壺Ⅱ期bと似るものであるが、胴部径の割に口径が小さい。Ⅰ期・Ⅱ期に分類できる。

Ⅰ期（1） 胴部が強く張り、下位に台形、上位に三角形の凸帯を接近させてめぐらせる。胴部はなで肩で、頸部でしまり、短い口縁部を直線的に外反させる。口縁端部は丸味をもつ。底部は接合しないが出土しており、平底である。刷毛目調整である。

Ⅱ期（2・3）

a.（2） 胴部のみの出土であるが、Ⅰ期と同じく下位に台形、上位に三角形凸帯を接近してめぐらし、台形凸帯に刻目を施すものである。刷毛目調整である。

b.（3） 採集品で、上記2点と比較して小さいが、一般的な壺とするとまだ相当大きい。器形はⅠ期とすこぶる似るものであるが、胴部は台形凸帯1条だけとなり、そこに刻目を施す。刷毛目調整である。



第 5 図

4. まとめ

これまで、出土土器について各器種ごとに概略その特徴を述べてきたのであるが、もう一度ここでより返って見よう。

本遺跡の調査で主体となって出土したのは、壺Ⅱ期・壺Ⅲ期である。これらがセット関係を有するのは明らかであるが、これらの土器が器形の上で中津野遺跡一括土器ときわめて近い関係を有するであろうことは推察するに難くない。差異点は、中津野出土土器において、壺形土器の長胴化が一段と進んでいること、底部が丸底であること、又作りが全般に粗であること、手捏土器が見られること等である。よって、本遺跡出土壺Ⅱ期・壺Ⅲ期は、中津野出土土器に先行する形式であるとともに、さほど遠くない位置に編年できる。言わば中津野出土土器の祖形ともいえるものである。次に、数量的には多くないがまとまっているものに、壺Ⅰ期・壺Ⅱ期がある。これらは、溝内同一層からの出土とはいえ、形態的にはⅢ期より先行するものである。壺形土器においては、「く」字形口縁の立ちあがり、胴部の張り出し、口縁部内面の内側突起の消失等の過程をへて、Ⅰ期→Ⅱ期へと移行したものである。壺形土器においては、壺形土器ほど明確でないがⅠ期bやⅡ期a及び大形壺形土器等から考察して、二又口縁の消失・凸帯の減少・刻目の出現等の過程をへて、Ⅰ期→Ⅱ期へと移行したものと考える。このように見てくれば、大形壺・大形壺のⅠ・Ⅱ期も壺・壺のⅠ・Ⅱ期と平行関係と考えられるであろう。それでは、各器種Ⅰ期に該当する土器はいずれの土器形式と関連があるのであろうか。ここで最も密接な関係を持つものに山ノ口式土器をあげることができる。壺形土器においては、充実した脚台・頸部凸帯と、中空の脚台・凸帯なしという差異点があるものの、「く」字形口縁内面の内側への突起という点で、近似性があり、壺形土器においては、本遺跡出土壺Ⅰ期aの胴部を球形化した器形のものが山ノ口式土器と共存している⁴¹。よって本遺跡出土土器Ⅰ期を山ノ口式土器の後に編年することができるであろう。

次にⅠ・Ⅱ期土器に伴出した土器を取りあげてみると、第4図3の簾状文を有する土器についてはⅠ期該当期の所産と考えるが、簾状文は中期に盛行した文様である。第4図4は、畿内系の土器と考えられるが、編年上は中期に入れられるものではないかと思われる。第4図5は、いまだ袋部外面に明瞭な稜線をつくらず後期初頭から前半の土器である。以上の点を考慮し、又山ノ口式土器が須玖式土器を伴出するという事実を目をむければ⁴¹、松木麓出土土器の編年上の位置を、後期初頭から前半に考えることは許されるであろうし、無理がないように思われる。Ⅰ期の土器を松木麓Ⅰ式とし後期初頭に、Ⅱ期の土器を松木麓Ⅱ式とし後期前半に考え、またあわせて成川式と総称される土器群のうち、中津野タイプの土器群はより古い形態であり、松木麓Ⅱ式からさほど遠くない位置に編年できるであろうことを指摘しておきたい。

松木麓遺跡の調査は、上村俊雄先生の御指導・助言のもとに行なわれた。また河口貞徳先生も、調査中しばしば現地に来訪され、御指導・助言をいただいた。有元彰順氏・旭慶男氏・平島勇夫氏・多々良友博氏・繁昌正幸氏・東和幸氏・浜川道也氏・及び鹿児島大学考古学研究会には手弁当で調査に協力をいただいた。旭慶男氏には、石器実測及びトレースも手伝っていただいた。池畑耕一氏・中村耕治氏には、整理中種々御助言をいただき、資料提供までしていただいた。平島・多々良

両氏からも多くの資料を提供していただいた。最後に土器洗いを手伝ってくれた加世田女子高考古学同好会諸君と、調査を心よく了解され、毎日差し入れをいただいた地主の小屋敷シズ子様の名をあげて、これら多くの方々の御協力に深く感謝するとともに、このような拙文で報告書を遅らせていることを申し訳なく思います。又明日から精進して、1日も早く報告書を完成させたいと思いますのでお許し下さい。

註

- (1) 文化庁『成川遺跡』1974年 吉川弘文館
- (2) 河口貞徳 「鹿児島県の弥生式諸遺蹟について」 (『鹿児島県考古学会紀要』第2号) 1952年
- (3) 河口貞徳 「入来遺跡」 (『鹿児島考古』第11号) 1976年
- (4) 出口 浩 「吉野町七社遺跡」 (『鹿児島考古』第8号) 1973年
- (5) 河口貞徳・河野治雄・池水寛治・上村俊雄・林敬二郎・出口 浩 「永山遺跡」 (『鹿児島考古』第8号) 1973年
- (6) 平田信芳 「卑人が用いた土器 — 成川式土器 —」 (『華人文化』第5号) 1979年
- (7) (1)に同じ
- (8) 森貞次郎 「弥生文化の発展と地域性 九州」 (『日本の考古学 III 弥生時代』) 1966年
- (9) 河口貞徳・出口 浩 「南九州弥生式土器の再編年」 (『鹿児島考古』第5号) 1972年
- (10) 河口貞徳 「山の口遺跡」 (『鹿児島県文化財報告書』7) 1960年
- (11) (9)に同じ